

チューリップからウォーターまで
—バブルの世界—

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

投資の世界でバブルというと、オランダのチューリップバブルが有名です。

これは 17 世紀のオランダに起こった経済事件で、オスマン帝国から輸入されたチューリップの球根が人々の人気を集め、価格がつりあがって、その後、大暴落、社会が経済的混乱におちいったというものです。値段が泡沫（バブル）のように真の価値を離れて膨張し、やがて、泡がはじけるように暴落したので、このように呼ばれます。

ところかわって、21 世紀の日本では、ウォーターのバブル、「ウルトラファインバブル」が注目されています。「ウルトラファインバブル」とは、1 直径が 1000 分の 1 ミリ以下の、微泡のことです。「水の技術として最初のイノベーション」とも言われるこの分野は、日本が最先端だとアルゼンチンの「ラ・ナシオン」紙が伝えています。

食品、化粧品、薬品、医療、半導体や植物育成等、すでに幅広い分野で活用されていることや、今後の市場規模、ファインバブル製造メーカーや、泡の大きさを計測する装置のメーカー、日本がリーダーとなって国際規格をつくろうとしていることなどが、紹介されています。

「この微泡は、泡がはじける衝撃によってバクテリアの破壊も促進、よりエコでかつ効率的な清掃や殺菌が可能になる。栽培の場合は、水の中にウルトラファインバブルを用いると微生物の活動がより早くなり、土中での根の成長が促進され、栄養素の吸収が早くなる。さらにこの水は通常の水に比べ溶解した酸素の濃度がより高い。」とのことで、ある調味料メーカーは、なめらかな味を出し、また賞味期限を長くするためにこのバブルをマヨネーズ製品の一部に使用したり、海産物を扱う会社が魚介の変色化をおそくさせ、新鮮度を保つために利用しているそうです。また、洗剤を用いず、このバブルを使ってトイレの清掃をすると、99%節水でき、清掃時間は三分の一に短縮でき、臭いもおさえられたとのことです。

ウルトラファインバブルの農業での可能性に魅かれ日本企業に入社したオランダの園芸、温室栽培専門家も出てきました。

「ラ・ナシオン」紙によれば、日本の「ファインバブル産業会」はファインバブルの世界市場を 2015 年の 97 億ドルから、2020 年に 395 億ドル、2023 年に 577 億ドルと見ています。しかし、詳細なメカニズムはまだ解明されていないとして、導入に慎重な意見の研究者もいます。日本のウルトラファインバブルの、バブルがはじけないよう、市場のサステナビリティに注目していきます。

参考資料：

- ・ラ・ナシオン新聞
<http://www.lanacion.com.ar/1876669-el-poder-de-las-sorprendentes-burbujas-japonesas>
- ・IDEC 社 <http://jp.idec.com/ja/technology/finebubble/aboutfinebubble.html>
- ・ファインバブル学会連合 <http://www.fb-union.org/about.html>
- ・一般社団法人ファインバブル産業会 <http://www.fbia.or.jp/>
- ・NHK サイエンスゼロ <http://www.nhk.or.jp/zero/contents/dsp515.html>
- ・日本気象株式会社 <http://n-kishou.com/gakuen/webschool/qa/detail/44>